

## 白樺

灰色の霧が私の呼吸を苦しくする  
ここは確かになだらかな広い高原であるはず  
それは分かっている・・・急ぎはしまい

この得体の知れぬ蜂の、小さなうなりは  
これはまたどうしたことなのでしょう  
霧の流れの如く単調にひしひし響いてくる

誰かの歌声が霧と共にゆらゆら漂ってくる  
鹿は一斉に首を上げ、耳をそばだてるだろう  
しかし、そんなあざけりに立ち止まりはしまい  
この単調な歩みが、私の生活の綱なのです

鹿が鳴きだした、次々に取り囲まれてゆく  
色が失せてゆく、身体がひりひり冷えてくる  
迫ってくるものがある、四方からじりじりと

私の<sup>こっぺ</sup>頭を垂れさせるもの、迫る

ふと左頬がひんやりとした・・・風  
それは微かだったが、十分よ  
歌声の主や、にじり寄る壁を慌てさせるに  
私はただ、今はこつこつと足を交互に前に出すだけ

すると、私の部屋の白い壁から浮き出た  
白樺、しかも見覚えのある  
全ては消え、立ち止まってよかった

幹にもたれ、<sup>はら</sup>掃われてゆく霧を見ていた

(誰が霧を掃ったのだろう・・・)

(1982.4.29)